

学校に思う

「おーい、学校に行こう…」。

小学校の入学式の朝、自転車に乗って担任の先生が私の家まで、迎えに来て下さった。既に、四十一年の歳月が過ぎてしまったが、この日の朝のことは、鮮明に覚えている。

入学前の運動会で、新一年生の旗取りが行われた。電車事故で両足を切断した私は、幼稚園の友達が、嬉々として運動場に飛び出して行くのをただ眺めていた。

その時、浅黒く背の高い、若い男の先生が私を小脇に抱えて、運動場に走り出て下さった。旗取りを終えた私に、「来年は待っているよ。自分が君の担任になるからな」と約束して下さったのである。この日から、大学を卒業するまで、色々な意味で、何と永い歳月であったことか。

「学校と名のつく所に通わせて、心配せずに済んだのは、自動車学校だけだった」と、母から言われたが、自分が親になり、子供を学校に通わせる側となつて初めて、親の苦勞と心配が理解できたような気がする。

子供の学校のことは、全て女房まかせでいた私は、父親参観すら行ったことがなかった。また、それを当然のように思っていたが、どういふわけか三男の中学校のPTA会長に就任す

る羽目になってしまった。九割が母親である。なぜか場違いの所に引き出されたようで、職業柄、人前でもあまりあがらない私だが、妙にドキドキして、冷や汗ものの会長就任の挨拶をしてしまった。改めて、学校について考える好機を与えられたのだと受け止めている。

学ぶとは、〴〵真似ぶが語源とされる。子供は親の真似をして、さらに、先生を真似て成長していくからである。子供を見るとその親の姿が見えてくるのも当然だと納得できる。

親の失敗を学校に責任転嫁しても、子供の心は救われない。学校や先生に要求する以前に、家庭での育て方、つまり〴〵躰〴〵（しつけ）を考えてみる必要を反省を込めて考えた。

少子化が社会問題となりつつあるが、確かに子供の数は減ってきている。教育費の問題や住宅環境などから、子供が減少するのは当り前とは思うが、少なくなった分、子供に過剰な期待を押しつけているのではあるまいか…？

放任と自由の履き違え、権利と義務、常識、責任といったことの理屈を並べても何の説得力も持たない。親の行動を見て、初めて子供はそれを吸収するのである。まさに〴〵真似ぶ〴〵そのものだと思う。

学業成績の優劣で人格は計られないと言いつつ、数字に惑わされている現実には、子供たちの未来を憂う。明るさや素直さ、他人を思いやる心などは数字では評価できない。口先や文字で教える事も難しい。

金銭的に恵まれずとも、財産なんか持たなくても、親が愚痴一つこぼさず精一杯働いて、

堂々と生きている。それが子供には立派な教科書であろう。

知恵のある親、導く先生、苦しみを共に味わった友人は、子供の宝物である。小学校入学時に出合った先生に導かれ、障害者の私は未来への門を開いてもらった。中学時代、三人の悪友を得た。彼等が必要以上の気遣いなどしなかった。健常者と同じように付き合ってくれた。高校に入ると、随分悪戯もやったが、この時代に悩み苦しんだ事が、大学時代に出合う素晴らしい方々の「教え」の受け皿になった。

今、長男は大学、次男は高専、三男は中二。それぞれが、己の時代を生きているはずである。親は親としての人生を一生懸命歩いて行けば良い。それが「躰」だと信じる。

(平成十年七月号)